

新年あけましておめでとうございます。
本年もどうぞよろしくお願い致します。

言葉を手渡す

初瀬基樹

「言葉を手渡す」というのは、樋口正春さんの著書『保育と環境』のなかに出てくることばです。

(以下引用) * * * * *

「大人と子どもの声の大きさと質」も、その園が良い園か、良くない園かを見分けるポイントの一つです。大人も子どもも穏やかに話している保育園・幼稚園は、まず良い園だと思って間違いはありません。

子どもと視線を合わすこともしないで、要求だけを大声で叫んでいるような大人がいる環境に乳児の頃から置かれていけば、大人の言葉を聴きたいという気持ちは育たないばかりか、「聞き流すクセ」を身に着けてしまう場合もあります。

…中略…

子どもに聴いてもらいたかったら、まず子どもの言葉を聴いてあげること、そして子どもにかける言葉は決して「投げない」で「手渡す」ことです。子どもたちが大人の言葉を「心地よい」ものとして受け止めてくれなければ、大人の言葉は子どもに届きません。

…中略…

言葉を手渡すという行為は、心をつなぐということです。集団保育ではあるけれど、一人ひとりの子どもとつながっていく意識が大人の中で働いていないと、大声で叫び、指示を出し、一斉指導型の保育になってしまいます。

…中略…

「〇〇ちゃん、ありがとう」とか、「* * ちゃん、助かったわ。また手伝ってね」などと、子どもにとって良いことを普通の調子で言ってあげれば、大人が自分を正しく評価してくれていると感じ、自分の良いところをしっかりと見ている人に対して信頼感を持つようになります。

また、そのように接してくれる大人に信頼感をもつだけでなく、人間に対する信頼感も同時に育っていきます。

岩手県遠野に在住の、わらべうたの語り部である阿部ヤエさんは、「子どもをひざの上におき、その子の目を見て語りかけるときが、その子が人間になるということの始まり」だという意味のことをおっしゃっています。

* * * * *

わが園はどうでしょうか？大人も子どもも穏やかに話しているでしょうか？

大人の発する言葉は、子どもたちに「心地よい」ものとして受け止められているでしょうか？

常に自分たちの保育を振り返りながら、これからも、より良い保育を目指していきたいと思えます。